集落機能強化

【福岡県豊前市枝川内集落協定】

集落機能強化加算を活用したサロンによるコミュニティづくり

○アジサイとソバで農業の持続と農地の荒廃防止
○世代間の交流を取り入れたサロン活動等により、住民の交流意識が向上

集落の課題

高齢化と若者不足

・地区の高齢化率は77.8%と市内でも高い。特に若者の流出は著しく、集落機能は厳しいものとなっいる。協定参加者も高齢化となり共同取組活動の限界が近い。

【急傾斜法面での草刈り作業】

取組内容

日本一のアジサイランドを目指す

・平成12年に基盤整備を完了させ営農組合を発足させる
・急傾斜地の農地法面は25%で３haの不要な農地が発生するが、法面の活用として集落内の景観形成にアジサイを植栽
今日では、1万6千株を有し、このアジサイが地域資源として、むらの活性化の一役を担っている。

交付金を活用したコミュニティ機能の強化

・集落機能強化加算を活用し、地域住民の交流の場として「アジサイ生き生きサロン」を年数回ほど開催
・コロナ禍でもつながりを途切れさせず、密になりにくい屋外での赤そば観賞を実施

取組の成果

高齢者の生きがいの増進

・高齢者の外出する機会の確保になり、人との交流や活動範囲を広げる機能を果たしている。
・「ストレス発散・憩いの場」としてとらえ、サロンが地域における人と人とをむすぶ場となっている。

荒廃農地の発生防止
地区内外が一体となってそばの作付け

・高齢化や死亡により離農した3haの農地にそばを作付け荒廃防止を行っている。
・地区全戸が集落協定に携わる中、営農組合や認定農業者が主となり農地を守る体制を確立する。

【ソバで荒廃化阻止】

取組地域の概要

○位置

○地域の概要
・市の南端に位置し、市街地から遠く離れ、林野に囲まれた狭小な谷間に僅かに広がる急傾斜地で零細農業を営む地域。

○主要作物
・水稲、そば

○集落協定の概要(R3)
面　積：11.4ha(田)
交付金額：273万円
　個人配分35%、
　共同取組活動65%
構成員：農業者19人、非農業者4人
協定開始：平成12年度

1　集落の概要

集落内を彩る1万6千株のアジサイとソバを活かし共存共栄のむらづくり

――集落の特徴を教えてください。

枝川内集落は福岡県の南東部に位置する豊前市の最も山間部にあり、戸数18戸、人口35人のうち50歳以下は5名、高齢化率77.8%の超高齢化集落です。人口減少・高齢化の進む中ですが、区民一体となり、農業経営や集落機能強化の活動としてアジサイの植栽や維持管理、祭りなどに取り組んでおり、集落の一体感が増した生き活きした集落になっています。今では集落内で1万6千株のアジサイを有する一大観光地となり、アジサイと農道を活かした森林セラピーロードの提供や農村民泊等のグリーンツーリズムにも積極的に取組を行っています。

中山間地域等直接支払制度による共同取組は、発足時は集落内農家16戸と地区外農家3戸の19戸で始まり、今では農家19戸、非農家7戸と集落外から認定農業者2戸も加わり、中山間地域の厳しい農業条件の中、制度の活用が有効に図られ、農地を荒廃させない農業が継続されています。

2　集落の抱える課題

高齢化、過疎化に伴う農業継続、アジサイ存続の危機

――集落にはどんな困りごとがありましたか？

枝川内集落が未整備田であったころ、旧態依然とした農業経営と集落機能が弱体化した将来像の無い集落でした。平成3年から集落の活性化を目指し地域コミュニティ再生の取り組みを開始、平成12年度に地区内10haの生産基盤整備が完了。新たな農業形態での営農を始めるが、同年、集落協定を開始するも協定不参加者がおり、獣害防止柵の設置や営農組合の運営に大きな支障を来すこととなりました。当初は16戸の協定参加農家が平成22年には不参加者の加入で19戸となりましたが、高齢化による農業の持続困難や事務負担は大きく、中山間直接支払制度の取組継続は厳しいものとなっています。

【山林に囲まれた枝川内集落】

――その原因はどこにあったのでしょうか？

超高齢化集落の人員不足は避けられず、後継者の居ない農家では離農しており、農業者を対象とする集落協定では離脱してしまいます。また、集落協定の事務負担は、高齢化と過疎化の進む集落にとって最大の課題で、事務処理ができる人材もなく、以上のことから協定の解散や離脱する意見が集落から出てくると思われます。

３　取組の経緯

――取組を開始したきっかけは何ですか？

平成12年に基盤整備の完了に伴い新たな農業形態でスタートをしました。膨大な法面とその管理に苦慮する日々でありましたが、その不要な農地の活用策として、中山間直接支払制度を活用してアジサイの管理と農地を含めた集落内の景観形成を図ることになりました。平成13年春に「ちいさなむらの大きな挑戦！・日本一のアジサイランド」を掲げ、地域住民が一丸となり、多くの方々への呼びかけで第1回の植栽会を開催しました。また、平成18年からは転作作物として、景観づくりにも活かせるソバの作付けを開始しました。

【アジサイ一色のむらとなる】

しかし、アジサイの植栽が始まってからも、集落の高齢化は止まることなく、20年前の高齢化率は65％だったのが今日では77.8％に達しました。集落内で「住民の高齢化」、「閉じこもりと介護予防」、「近隣関係の希薄化」、「健康づくりへの意識」という視点からの取り組みが必要であると考えました。そこで、集落機能強化加算を活用すれば、より積極的に地区が一体となって取組ができると判断され、コミュニティづくりが始まりました。

４　取組の内容

――集落機能強化加算はどのようなことを行いましたか？

令和３年度から集会所にコミュニティーサロンを開設（サロン名：アジサイ生き活きサロン）しました。同地区は市の中でも高齢化率が高い地域でもありますが、世代間交流ができ、地域住民の病気や障がいについての理解が深まり、地域住民同士の支えあいが実現できるよう、サロン利用者の対象は高齢者のみに限定することなく、地区内の農業者はもとより非農家や地区外の住民に門戸を開きました。

サロンの開催は年に数回、食事会、健康教室、ゲーム等の活動を行い、足の悪い高齢者に対しては車での送迎や車いすのリースを行い対応しました。また、コミュニティＦＭを開局し、サロン情報、中山間共同取組活動の案内や集落内の多様な情報を発信して、地域の振興、その他公共の福祉の増進に寄与することができました。

５　取組の成果

――取組の成果として、具体的にどんな変化がありましたか？

「アジサイ生き活きサロン」の活動は、高齢者の皆さんから大変喜ばれており、「ストレス発散になった」「癒しの場になった」という声もありました。

参加者の特徴として独居や二人世帯が多いことを考えると、日常生活における人との交流や活動範囲が限られていることが予測され、年３回開催のサロンであっても、参加者にとっては外出する機会の確保であり、人との交流や活動範囲を広げる機能を果たしているといえます。

当初は、しぶしぶ参加されていたような方でも、知らず知らずのうちにその場に馴染んで楽しんでおられ、より良い関係性へ発展しています。このことは、サロンが地域における人と人とをむすぶ場となっていると評価できるのではないでしょうか。

――農地の保全状況はどのように変わりましたか？

耕作条件の悪い農地にはソバを作付け、「アジサイ生き活きサロン」の活動のなかで赤そばの観賞を行い、地域のコミュニティの活性化に繋がりました。このようなことから、農地を景観として保全することに大きな効果を表しました。

【集落機能強化加算での取組　赤そばの花】

６　人材、資源、制度の活用方法、工夫

集落内の資源や人材を活用

――中山間直払はどのように活用しましたか？

　コミュニティサロンの取組については、サロンの会場費（使用料・電気料等）、サロン講師や必要な物品の手配、チラシの作成費、ゲームの材料費、新型コロナウィルス感染対策費などの活動費として活用しています。また、コミュニティＦＭの開局費用や維持費にも活用しています。

――地域の資源や人材はどのように活用しましたか？

　コミュニティサロンは、集落内の施設を利用して、集落にいる介護支援専門員を講師に、認知症、介護予防のお話会などの活動を行っています。レクレーションの後は、地元産手打ちそばの提供を行い大好評を得ています。

【アジサイ生き活きサロン】

７　苦労した点、克服方法

コロナ禍で一層の必要性を実感

――取組を進める上で特にどんなことに苦労しましたか？

　新型コロナウイルス感染症の広がりによって、地域住民等による地域活動は休止や延期等の活動自粛が増加するなか、参加者の健康面、精神面が不安との声が上がりました。コロナ禍で一層サロンの必要性を実感し、開催にあたっては、これまで施設には常備していなかった消毒液、マスクなどの消耗品や必要備品をそろえ、参加者同士の間隔をとるなど、感染症対策を徹底し、安心して楽しく参加できるものにしました。また、密になりにくい屋外での赤そば観賞といった開放的で楽しいサロンを実施しました。

８　集落の今後、他の地域に伝えたいこと

目標は大きく　ちいさなむらの大きな挑戦

――今後、集落はどんなことを目指すのですか？

　超高齢化集落での維持活動で大事なことは、小さな力を結集して共存共栄社会を再構築することであると考えています。アジサイを拠所に集落全体で目標に向けて邁進し、あらゆる手段を講じて高齢化集落でのむらづくり活性化を目指したいと思います。

――同様の問題に悩む他の集落に伝えたいことはなんですか？

　本集落では、拠所や核として、アジサイを植栽し、地域の活性化に繋がる取り組みを行うことになったとき、少なからず反対意見がありました。何処の集落でも反対意見が出るものかと思いますが、「みんなで相談、みんなで計画、みんなで実行」を合言葉に全員参加の仕組みを作り、且つ役割分担し取組むことで集落に一体感が生まれ、各自前向きな話ができるようになります。

　また営農組織への受託と機械作業の効率化やコスト削減に努め、厳しい農業経営に対応し農業の持続を図ることが大切であると考えています。